

安定多収のための圃場準備

大豆作のはじまりまでおよそ1か月となりました。安定多収を図るために、

- 1.排水対策の徹底
- 2.土壌pHの適正化
- 3.地力向上

の3つのポイントを押さえた圃場準備を行いましょう。

1. 排水対策は収量確保の必須条件

大豆は湿害に弱く、特に出芽期の湿害は大幅な減収に直結します。排水対策を万全にすることにより、出芽数が確保され、播種から初生葉展開時期の初期生育が旺盛となり、さらに根粒菌の着生が促進されます。

(1) 排水対策

①明渠の施工

トレンチャーやバックホーで、圃場額縁に深さ40cm程度の明渠を設置、補修します。確実に排水するために、明渠は必ず排水口につなぎましょう。

②補助暗渠の施工

排水不良圃場では、サブソイラによる心土破碎や、弾丸暗渠などの補助暗渠を施工し、排水性を高めます。補助暗渠は、本暗渠に接続し、5~10mおきに施工します(図1)。

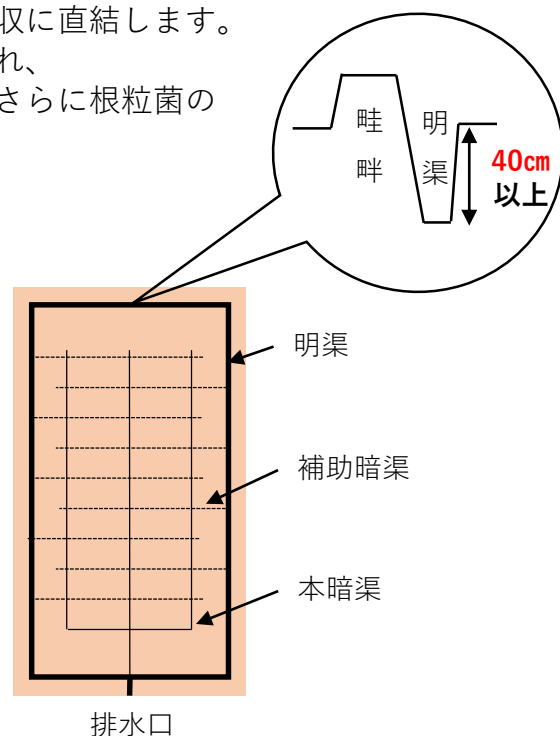


図1 明渠と補助暗渠の施工例

(2) 丁寧な耕うん・砕土を

耕うんや砕土は丁寧に行います。砕土が不十分だと出芽揃いが悪くなるだけでなく、除草剤の効果が低下します。ロータリー耕では、トラクターの速度が速いと耕起深が浅くなりやすいため、耕起作業はゆっくり行います。

播種時の圃場の砕土率(直径2cm以下の土塊%)は**7割以上**が目安です。土壌の排水性を確保し、乾いた土壌で丁寧な作業を行いましょう。



やまがた **アグリネット**

<https://agrin.jp/>

新着情報をFacebookやTwitterでお知らせします。



やまがた
アグリネット



Facebook



Twitter

2. 土壌pHを適正化して増収

大豆が生育しやすく、根粒菌が働きやすい適正な土壌pHは6.0～6.5です。しかし、管内の大豆圃場の多くはpH6.0を下回る状況にあります。石灰資材を積極的に施用し、土壌pHを高めましょう。複数年にわたって継続的に施用することでpHが改善されます。

一般的な圃場の施用量は炭カルで120kg/10a程度が目安です。

表1 資材の種類と施用量の目安

資材名	炭カル	苦土石灰	粒状消石灰	ようりん
アルカリ分(%)	53	55	65	29
炭カル120kg相当の施用量	120	116	98	219

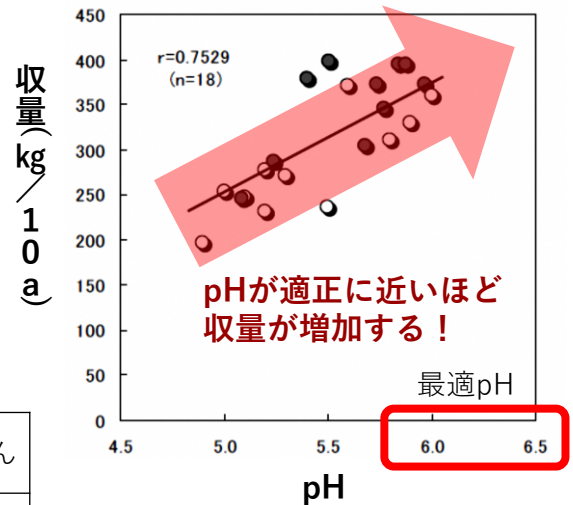


図2 土壌pHと大豆収量の関係 (坪内・斎藤,2010)

3. 連作圃場の地力維持には有機物施用

大豆は子実100kg生産するのに8kgの窒素を必要とします。そのうちの5割は根粒菌が担いますが、残りの大部分は地力窒素に依存しています。大豆の連作が長くなるほど、地力窒素が低下するので、安定多収のためには堆肥等の有機物を施用し、生育後半まで養分を供給することが重要となります。また、基肥は初期生育を担うスターターとして必要です。

堆肥・鶏糞施用量

施用量の目安は、完熟堆肥で1～2 t/10a、発酵鶏糞で100kg/10a程度

基肥施用量 (kg/10a)

窒素	リン酸	カリ
2～3	7～8	9～10

▼基肥施用例

【大豆化成684】

→現物40kg/10a(窒素2kg/10a)

【大豆専用一発S552】

→現物40kg/10a(窒素6kg/10a)

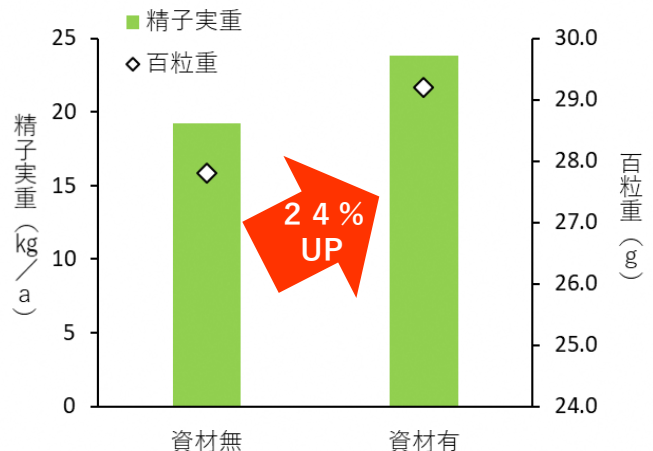


図3 連作17年圃場における資材施用の効果
※数値は連作15～17年目の平均値、品種は「リュウホウ」、資材は7年目から施用し堆肥4t/10a、炭カル120kg/a、9年目以降はその半量とした(H29、秋田農試)。

**農作業中の事故
を予防しましょう!**

ヘルメット・シートベルトを着用

